

3. 関西の各分野の動き

⑤ 文化多様性から生物多様性への気づきを

Promoting Biodiversity Awareness on the Basis of Cultural Diversity

生物学関係者や環境学関係者だけが生物多様性の価値を語る状況では「生物多様性の主流化」は難しい。伝統文化の関係者が文化と生物多様性の深い結びつきを理解し、語ることが重要だ。文化多様性についてはUNESCOを中心に文化多様性条約等の国際的取り組みが作られているが、生物多様性とも深く結びついたものとして認識され、研究も進展しつつある分野である。わが国の、特に京都を中心とした伝統文化を見ると、茶道、和歌、能、和菓子、和食等さまざまな要素の中に自然との結びつきを見いだすことができ、弘道館等茶室での実践ではそれらが統合した形で展開される。生物多様性は素材として、また資源として伝統文化の中に活用されているが、一方でそれらはそのまま使えるわけではなく、半栽培を含む管理や加工、流通まで含め体系が揃っていないと使うことができない。生物多様性は文化によって初めて資源化される側面がある。生物多様性の価値にとって文化多様性が重要な意義を持つ部分である。

こうした文化多様性は都市生活者に対して、食や文化芸能を通して生物多様性の価値を、特にエモーショナルな感性の部分で伝えるためには有効である。しかし、こうした文化の中で自然に触れて感情を揺さぶられるためには基礎となる体験の裏打ちが必要である。生物多様性保全のためだけでなく伝統文化の維持のためにも、子どもへの自然体験機会の提供等を地域戦略等で計画的に位置づけていく必要がある。

伝統文化と自然の結びつきは、各地の地域資源の再発見やブランディングにつながりやすいが、広く近隣地域を見ていかないとセルフオリエンタリズムに陥りがちな面もある。学術研究者の参画や地域でのコーディネート役を供給する自然史系博物館や大学等のプロデューサー機関も重要である。



Making biodiversity a mainstream issue is difficult if only those people in biology and environmental studies talk about the value of biodiversity. It is important that people who engage in traditional cultural activities understand and discuss the deep connections between culture and biodiversity. With regard to cultural diversity, UNESCO has been leading international efforts, including securing the adoption of the Convention on the Protection and Promotion of the Diversity of Cultural Expressions. Cultural diversity is recognized as being closely linked with biodiversity, and research related to this has advanced. In the traditional culture of Japan, and particularly especially that of Kyoto, one can find connections between nature and various elements of tea ceremony, traditional poetry, Noh dance, traditional confectionery, and traditional cuisine. The actual tea ceremonies taking place in specialized rooms at Koudoukan and other places use these connections with nature as an integral part. Although the products of biodiversity are used in traditional culture as materials or resources, they often cannot be directly used and require an established system of activities to provide management (e.g., through semi-domestication), processing, and distribution. In a way, biodiversity provides resources only when cultural activities are involved. In this sense, cultural diversity contributes significantly to the value of biodiversity. Cultural diversity therefore can provide a way to convey, in an easy-to-understand manner, the emotional value associated with biodiversity that is attached to foods and other urban consumption goods. However, to be moved by nature in a culture such as that described above, people need background experience. To not only conserve biodiversity but also maintain traditional culture, it is necessary to plan regional strategies for providing children with opportunities to experience nature. Emphasis on connections between traditional culture and nature can easily lead to rediscovery of local resources in various regions and branding of these regions; however, it can also result in self-orientalism in an absence of consideration of neighboring regions. It is important that academic researchers participate in the relevant discourse, and that natural history museums and universities act as coordinators or producers.

1 はじめに 伝統文化と生物多様性

生活をしているうえで生物多様性を実感することは難しい。内閣府(2014)によれば、「生物多様性」という語の認知すら減少している現状にある。農地という現場にいる「百姓」ですらその実感が難しい(宇根2000)という現状では、都市住民が生物多様性を日常の中で実感し、行動を変革することは簡単なことではない。多くの生物多様性地域戦略が生物多様性の「主流化」を目標に掲げ、教科書(加藤2016)や博物館(姉崎・篠原 2016、石田・釋2016)、動物園(Patrick et.al2007)でも生物多様性の価値や重要性を伝えようとしている。法人向けには社会経済的なアプローチでの取り組みも進んでいる(岡野・笹淵2017)が、一方で、社会の中の大人に対して、生活変革を迫るようなアプローチは少ない。社会経済的なアプローチにより供給側に生物多様性配慮を促しても、消費側の意識が高まり、生物多様性配慮や環境配慮型商品への実需要が高まらなければ、社会システムそのものに生物多様性配慮にむけた変革を迫ることは難しい。都市住民の生活に根ざす生物多様性の「主流化」が必要である。

これまで「生物多様性」といえば、生物学や環境学分野で語られてきたが、文化に携わる者こそ語らなければならない時期に来ている。生態系サービスと文化伝承の問題の関連や、文学の理解も環境科学の側から深めることができる部分もある。本稿では「生物多様性と伝統文化」という、一見つながってなさそうだが実は深いつながりがある、生物文化多様性について考えてみたい。

文化の側からは、生物多様性とは、「生きものたちの豊かな個性とつながりのこと」であり、「一つひとつに個性がある生命が、すべて直接に、間接的に支えあって生きていること」を大切にしようという動きだと理解している。このような当たり前のことが崩壊しつつあるのは、なぜか。言うまでもなく、人類の歴史は環境破壊の歴史である(ウエストビー 1990)。cultureとは「耕作すること」を意味し、文化とは環境を破壊することから始まっ

ていると言うことも可能である。しかし、人はそれを「崩壊」だけではなく、持続可能な形、いわゆる「共生」の方向に導いてきた。稲作という環境破壊は、2千年の時間をかけて、人と自然の「共生」の道を育んできた。それが大きな文脈の中での「文化」である。

文化と生物多様性の結びつきの深い理解の中で、アーティスト、料理研究家、文化財関係者等多様なオピニオンリーダーが、生物多様性と自らの仕事との関連を語るにより、さまざまな関心を持つ幅広い市民に生物多様性の意義を伝えることにつながる。そして、理科・科学以外の話題の中に生物多様性を織り込むことができる。日常の食事の会話の中に、茶事的话题に、お祭りの準備をしながら生物多様性の重要性を再確認できるようになるのなら、それが「生物多様性の主流化」のひとつではないか。本稿では2014年12月に京都市下京区京都劇場で開催された第7回生物多様性協働フォーラム「いのちにぎやか、文化ゆたか」での議論を基に、生物多様性と文化の関わりを述べていく。

2 生物文化多様性とは何か

生物多様性が生み出す生態系サービス(自然の恵み)において、基盤サービス、供給サービス、調整サービス、と並んで「文化的サービス」がある。世界各地の自然が異なるのと同様、各地域には多様な民族が固有の文化を形成している。もちろん、自然はこれらの文化の形成に深く関わっている。同様に地域に固有の文化はその地域の自然を改変し、生業に深く結びついた文化的景観を形成する。生物の多様性同様、こうした各地の文化的多様性も危機に瀕しており、今世紀に入って以降Harmon(2002)をはじめ、生物多様性と文化多様性の危機を結びつけた議論がなされている。生物文化多様性は、単に生物多様性と文化多様性の総体としてだけでなく、互いの相互作用までを含んだものとして理解されている。

UNESCOは文化の保護を目的として2007年に文化多様性条約を採択し(日本は未批准)、この形成過程でフランスのシラク大統領は「文化の多様性の保護は生物多

様性の保護に對置される」と表明し、さらにUNESCOは生物多様性と文化多様性の結びつきについて同年および2008年に“Links between biological and cultural diversity”と題したワークショップを開催し両者の結びつきについてコンセプトを固めていく。一方森林研究者の側でもこれに呼応するようにwoodland cultureとして、森林の文化的価値について議論を深めている(Saratsi et.al 2009)。

国内的にも人間文化研究機構が2010年にシンポジウム「食：生物多様性と文化多様性の接点」を開催している(同シンポジウムの記録集 <http://www.nihu.jp/ja/publication/ningen/12> 2017年12月16日確認)ほか、湯本(2011)らの共同研究により、里山や奥山、海洋を含めた生物文化多様性の議論がまとめられている。近年では地域づくり等の観点からの議論や社会形成ともからみ多くの議論が提出されている(須賀2013、敷田2014・2015、木村2016、永松2017、湯本2017ほか)。

こうした議論を受け、近年の各地の生物多様性地域戦略の中にはこの概念を含めた戦略を形成している地方公共団体が増えている。

3 | 生物多様性に支えられた京都の伝統文化

京都は日本の中でも最も伝統文化の蓄積された地域のひとつであり、なおかつブランドイメージが形成されている(小川2008)。文化的蓄積の中で形作られた世界観、自然認識、選び抜かれた素材、そして景観の中に京都の自然が息づいている。京都を京都たらしめているのは京都の文化の背景にある生物多様性であろう。こうした観点でいえば、観光利用も含めて、生物多様性なくして、京都の文化はありえないのである。

伝統文化とは、人の歴史の積み重なりであり、環境との「共生」をいかにしてはかることができるのかを模索する歴史である。人が自然とともに生きる「知恵」を編み出してきた、その積み重ねそのもののことであると言えるだろう。

逆にいえば、伝統文化をひもとけば、人間と自然の歴史が見えてくるのではないだろうか。しかも日本文化は美しく、また多分に「遊び」のなかから培われてきた。身体で感じ、感性に訴えるものは、遠い記憶を呼び醒まし、過去との「つながり」、先人との「つながり」を確かにしてくれる。過去との「つながり」の回復、これは現代社会における大きな課題ではないだろうか。「先人の知恵」を実感できることが伝統文化であり、伝統文化をもっと使って、「つながり」を感じることができればと思う。

京都という土地は、積み重ねられた歴史や市中に残る文化財から、そしてさまざまな京の暮らしの中においてもこうした先人の知恵を感じることができ、また人々に伝える力を持った土地でもある。京都の伝統文化によって生物多様性とのつながりを感じることができれば、ほかの土地でもその土地の文化と多様性のつながりを見いだすことができるのではないか。以下に、京都の伝統文化の象徴的なものを7つほど例示し、その中での生物多様性とのつながりを示してみたい。

1) 茶道

茶道は、煎茶・抹茶ともに、「茶を飲む」という日常の行為を「道」にまで高めた日本を代表する伝統文化であり、文化庁は現在ユネスコ無形遺産への申請を検討中だという(https://www.nikkei.com/article/DGXLASDG22H9Z_S7A220C1CR8000/ 2017年12月25日確認)。わが国の「生活文化」の代表でもある。亭主が客を迎える正式な茶事では、待合から露地をわたり、席入ののち懷石と酒をいただき、主菓子をいただいた後いったん外に出て(中立)、ふたたび席入をして濃茶、干菓子、薄茶をいただく。この4時間の茶事には季節や亭主の思いが込められたテーマがあり、そのテーマにあわせてあらゆる道具や室礼が整えられる。掛け軸、釜、茶碗、塗りの茶器、竹の花入や茶杓等、一席ごとに、客のために製作され、あるいは持ち合わせの中から選び組み合わせることにより、美の空間を作り上げる。その「場」となる茶室にも、徴を風情としてとらえる土壁、日常ではほとんど扱わなくなった炭を用いる炉壇、適度な湿度

図1 茶事。夜咄茶事では、和蠟燭や菜種油の灯火を用いる



出所：有斐斎弘道館提供

と光度を調整する紙障子、そしてほんの数十年前までどの家庭でもみられたイグサの畳等、まさに生物多様性を体現するような数寄の空間であり、しかしながら、現在すでに入手できない材料もあり、また技術も失われつつある。そのほか、露地庭の垣根や枝折戸、灯籠、つくばいからシュロ簾まで、さまざまな技術や材料が、一期一会の場のために創造され、磨き上げられてきた。

日常において「生物多様性」を実感するのは難しいという課題があるというが、生活文化としての茶道の場は、まさに生物多様性の上に成り立っており、茶道をひもどくことで、生物多様性の重要性を学ぶことができる。

2) 和歌

和歌には、神を敬い感謝する神歌、四季折々の風情を美としてとらえるとともに、悲しみや喜びといった人間の感情を自然に投影して詠う春夏秋冬の歌、そして生物維持本能に基づくともいえる恋の歌等がある。和歌は人がこの世に生を受けて自然に生かされ自然と共生すべき存在であることを教えてくれる知恵である。和歌は単に三十一文字を並べるだけでなく、古人の歌を学び踏襲することが求められる。それは古人の美の見方を学ぶこと

であり、古人の自然との共生の知恵を身につけることでもある。また、そのような美の言葉を通して、自然と対話し、季節のわずかな「うつろい」を発見する力を養うことができる。生物多様性を日常において実感する感性を養うためのツールと言える。

3) 能

能楽は室町時代に大和から京に出てきた観阿弥世阿弥父子によって大成され、江戸時代に幕府によって式楽として制定され全国に広まった芸能で、2001年にUNESCOの世界無形文化遺産の前身である「人類の口承及び無形遺産の傑作の宣言」に、2006年の条約成立後改めて2008年にUNESCO世界無形文化遺産に登録されている。(UNESCO <https://ich.unesco.org/en/RL/nogaku-theatre-00012> 2018年1月17日確認) 江戸時代に各藩で奨励された能楽は、地方の伝説や古層文化が作品として現代にまで伝わっている例も多く、生物多様性および文化多様性にとって重要な地域文化の歴史を伝えているとも言える。また、ひとつの舞台を構成する要素として装束や能面等も重要だが、楽器は大陸から伝来して日本化を遂げたものが多く、歴史をひもどく

ほどに生物文化多様性に潜む長い歴史を知ることができる。たとえば、小鼓・大鼓・太鼓という3つの種類の打楽器が用いられているが、いずれもルーツはアフリカにあると考えられており、そこから海陸のルートを伝って日本の気候風土に応じて素材や形、演奏の仕方を変化させながら現在に至っている（大倉ら2017）。完成された3つの楽器はそれぞれ材料（材木と皮革）を異にしており、音の性質も異なっている。これらをひもとけば、3つの伝来ルートが見えてくると同時に、いかに日本人が多様な民族の文化を受け入れるとともに、自然環境に適応させる工夫をしてきたのかということが分かる。

4) 和菓子

和菓子は、自然の甘味としての果物をルーツとし、大陸からの唐菓子や宋の飲茶文化、ポルトガルからの南蛮菓子文化等、諸外国の影響を受けながら独自に発展を遂げてきた。和菓子の中でも「京菓子」は2017年に京の無形文化遺産に選定（京都市文化市民局文化財保護課 京都をつなぐ無形文化遺産 <http://kyo-tsunagu.net/kasha> 2018年1月17日確認）され、高い芸術性とともに生活に根付いた文化として評価されている。京菓子は、有職儀式典礼に用いるものであり、また茶道に用いるものと定義され（濱崎・勝治2015）、京の公家文化と茶道文化の発展の上に成立した世界でも稀に見る食文化である。主な素材としての小豆や糯米、砂糖は、いずれも地方において洗練され、各地の特産品にもなってきた。たとえば小豆は農家にとって重要な換金作物として栽培され、地域ごと畔ごとに異なる多様な品種が生まれ、京菓子の味や多彩な表現に貢献してきた。また、京菓子は抽象的かつ、自然のうつろいを投影した「はんなり」とした色彩で表現される。そして茶席で供される際、「銘」がつけられるのだが、その銘は和歌から採られることが多い。自然との共生の知恵としての美しい和歌の言葉が菓子に付され、その菓子を茶室で体内に摂りこむ。まさに文化を食し、文化と一体になる体験といえる。

5) 和食

2013年にUNESCOの無形文化遺産に登録された

図2 丹波ツクネイモのきんとん。色だけで季節の移ろいを抽象的に表現する



出所：有斐斎弘道館提供

「和食」は、「自然を尊ぶ」という日本人の気質に基づいた「食」に関する「習わし」とされる（農水省 <http://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/ich/>）。日本列島というレベルで流通する昆布や鰹節、地域の味噌等の発酵食品、そして家庭で維持される香の物等さまざまな空間スケールで自然と結びつく。たとえば京都市中の商家杉本家では、自家で「桃山大根」（吉野2005）を用いて漬けたたくあんが必須であったという。地域の品種や季節感は特別な料理でなくても日常の食事と結びついて続いてきた（杉本2008）。

6) 染色

明治以降の化学染料が普及する以前の、いわゆる「伝統色」は植物や鉱物、動物から多くの色を得てきた（吉岡2010）。多くの技術は古代中国が伝わったものであり、材料も遠く熱帯から持ち込まれたものも少なくない。たとえばベニバナの花粉は古代の遺跡からしばしば検出される。また、蘇芳（*Caesalpinia sappan*）は熱帯のマメ科植物であり心材の赤い色素を用いる。蘇芳は正倉院にも保存されており、良い色のためには古くから材料を広く海外にまで求めていたことが分かる。草地の減少に伴

いカリヤス等身近な材料でも手に入りにくくなったものもある。

7) 建築材料

古民家の建築材料から屋根材に至るまで素材は地域の中の環境モザイクの中から得られてきた(安藤ら1995、深町ら1997、奥・村上2011)。古民家の少なくなった現在でも、京都府南丹市美山の茅葺き民家群、あるいは社寺等の伝統的建築物の屋根の維持は屋根拭きの人材と材料の不足が深刻である。古民家をつくる杣、木挽、大工の技術継承はより厳しい状況にある。

4 | 文化と科学の融合 ～有斐斎弘道館での実践から

前項に掲げたさまざまな要素は実践によってひとつに結びついている。濱崎は有斐斎弘道館という、江戸時代の学問所の再興に取り組んでいる。マンションになりかけた建物を保存するところから始まったが、この10年間で荒れはてた庭も蘇り、茶会や展覧会、またさまざまな京文化教養講座を開催している。江戸時代にはここに全国から3千人集ったと言われている。

学問所を開いたのは皆川淇園(1735～1807)で、科学者でもあり芸術家でもあった(中村1986)。江戸時代におけるそのような総合的な知のありようというのは、芸術文化を通して培われたのではないかと考えている。和歌や茶、能等を通して、感性的、身体的に身につけていた「美」と「知恵」は、文化と科学が分離されがちな現代において有効な視野を提示してくれる。個別の知識ではなくて、「つながり」の「知」が大事であり、それらを体得できる方法が、茶道や能楽等の芸能であると考えている。

たとえば茶室では、生物多様性と文化多様性の接点をたくさん見いだすことができる。茶席菓子の色が、その日の山の端の色をみて決められる。東山と西山と北山はすべて色がちがっており、菓子もまた四季ではなく節季ごとに大きく変化するというのは象徴的である。山・里・水辺といった、自然と人とのボーダーにつねに心を傾けることで、はじめて、お茶席の美は成り立つ。

そして、炉には灰と炭が使われる。人間の文化のはじ

まりとも言われる「火」を実感することすら、今や稀な時代である。焚き火は禁止、焼き芋も、とんど焼もできない時代で、茶室も火気厳禁のところが多く、今や炭を使える茶室は稀になっている。日本全国どこでもみられた炭焼き小屋はなく、炭は貴重品で、ここ数年で何件もの炭焼業者が廃業されている。そのような中、火の大切さを知ることが重要だと実感する。火を扱うことは、同時に、火の恐ろしさや、いかに危険であるかということを知ることができる。茶事等によって火をコントロールするという基本的な技術を身につけることは、現代の人間にとって大事な「知恵」の再興につながるかもしれない。

こうした観点で、伝統文化は、自然との共生を考え、回復するための、ひとつの有効なツールなのではないか。伝統文化が現代に息づき、楽しく有効に活用されていることこそが、生物多様性が保たれている証とも言える。

自然と人の「あいだ」をうまくとりもつ知恵の代表が「和歌」である。茶道はもとより、能や歌舞伎等、ほぼすべての日本文化の基底となっているのが和歌というところも、重要な観点であり、日本人がいかに自然との共生を問題にしてきたかを語る証左とも言える(このような知恵を生み出してきたということはつまり、自然と人との共生が簡単ではないということも意味するだろう)。

和歌は自然の「美」を切り取るというが、実際につくってみると、「自然」という偉大な存在に「気づく」ための目を養うことができることに気づかされる。それは、すなわち、普段は「気づかないものなのだ」ということではないか。だからこそ人間は和歌を詠み、茶道をし、能楽を実践したりしてきたのではないか。「美」を感じることは、すなわち、自然と人との関係を取りもつということであり、そのための人間の知恵が、伝統文化に込められている。

5 | 文化があってはじめて生物多様性を資源にできる

前項では、生態系から供給されるさまざまな「資源」がどのような文化と結びついているのかを列挙したが、「資源」は用途と利用の体系があって初めて価値が生まれる。

図3 江戸時代の学問所「弘道館」を現代の学芸サロンとして再興した「有斐斎弘道館」



出所：有斐斎弘道館提供

イネ科の植物カリヤスは上記のように染色材料にも、屋根材にも使われる植物だが、必要とする利用者に届かない限りはただの草でしかない。しかも大抵は1株あるだけでは資源にはならない。草山として管理された広大な草地があって初めて質・量のそろった資源として利用が可能になる。笹葺き屋根に利用するチマキザサも明るい場所で3年程度の周期で刈り払われて初めて屋根に適した良い笹になる。ササがあれば資源なのではなく、そこに人間の管理が加わり、持続していることで初めて資源になる。それを業として管理して、集め、届けるサプライチェーンがないと、文化は続かない。草を束ねる良いクズがない、カンジキに加工するよいクロモジがない、カリヤスがない、こうした「ない」は決して絶滅危惧になっているわけではない。明るい管理された草地が少なくなり、そうした場所で伸び、からまったり分枝していないクズが少なかったり、刈り取られた後で萌芽し真すぐに伸びたクロモジがないというだけだ。生物多様性を資源として活かすためには利用の体系の維持が必須である

(こうして利用された「里山環境」が生物多様性にも結果として貢献した)。こうした体系の中には村の鍛冶屋等道具の担い手、地域の産物をまとめる送り手、ときには中間加工の職人等、簡単には維持できない産業構造が浮かび上がる。まさに、文化多様性が維持されないと生物多様性が維持できないのであるが、必要な技術革新を折り込みつつ、生物多様性を資源として活かす新たな文化の再構築を模索していかなければならないだろう。

「生物多様性の資源化」と言った場合に、しばしば「地産地消」が引き合いに出されるが、京都や大阪と言った古くからの都市では古代から良いものは遠くから取り寄せていた。薪や炭等の燃料ですら広域の流通体型があり、里ではそうした都市需要に結びついた生産をしていた(佐久間・伊東2011)。台場クヌギによる池田炭等を見ても、都市の需要は良いものであれば高く評価し、高い費用を払ってでも引きつける。単に資源として活用しようというのではなく、染色でも炭でも技術を高めて良いものをつくり、国内の都市でも海外でも需要家を引きつ

け対価を得るための努力とチャレンジが欠かせない。特に京都等では観光という形で世界の需要を都市に取り入れ、地産地消ではなく、地域の資源を世界に向かって活かすチャンスを得ている。その中で持続可能なプランを描く必要に迫られている。

6 | 文化多様性がつむぐストーリーとストーリーを支える体験

消費者が生物多様性配慮型商品を選択する価値の中にはエシカル（倫理的）な価値とエモーショナル（感情的）な価値が含まれる（宮川2018）とされ、バランスの良い情報提供が重要だという。しばしば「商品の持つストーリー」と表現されるこうした価値を表現する時に、伝統や文化は用いられる。伝統や文化の中に込められた、自然と向き合ってきた歴史の厚みと時間の重みに思いを馳せることで、多くのメッセージを込めることはできるだろう。

しかしそうした伝統の中にあるもの、文化的なものを「心地よく、楽しいもの」と感じることができるのは、その地の四季や自然を感じ取る感性を必要とする。文化多様性が提供するさまざまなストーリーにエモーショナルな価値を見いだすことができるためには生物多様性を感じる体験の裏打ちが欠かせない。

たとえば、和歌は詠むためにも鑑賞するためにも、体験に裏打ちされた感性を特に必要とするもののひとつであろう。季節感、読み込まれた植物や事物の多くは、京都に暮らす現代の私たちにもそう遠くない存在である。ただ、目を留めていないだけだ。和歌はこうした感性を磨くためのトレーニングツールであるとも言える。日々自然に目を留め、体験し、和歌を詠む。子どもからシニアまで取り組むことができる「気づきのためのツール」のひとつだろう。

動物への共感幼少期に動物に対する親近感をもつ等の感情的な体験の積み重ねが重要であるという（Clayton & Myers 2015）。日本画家として絶滅危惧動物等を花鳥図の様式で描く佐藤潤氏の原体験も動物園や博物館にあったという。子どもたちが「好きな動物」として名前を

上げるゾウやサイ、トラ、ライオン、ゴリラ等の動物が実際には絶滅危惧種であり、保護増殖の難航している種も多く、動物園でも今後も見られるのか危ぶまれている。佐藤氏はこうした子どもたちの感覚にも寄り添いつつ、動物の美しさを描き、多様な動物がいる価値を伝えたいという（佐藤潤氏HP http://www.geocities.jp/rm_muse/ 2017年12月15日確認）。

次世代への自然体験の提供には自然系博物館の役割も大きい。京都では観察会活動等を提供する公立中核館がなく、大学博物館やバーチャルな物に限られる中、大文字山麓の法然院が「森のセンター」として体験活動を長年提供している（久山2003、2008）。科学的な知識だけではなく、森の生態系の役割や生きもののつながり等を踏まえた観察会にこだわり、また長い時間をかけた森づくりにも取り組む。こうした原体験がないとストーリーも心を揺さぶらない。かつては、生業として山に向き合う中で、生活のために親から子へと自然についてのさまざまなことを伝えることが必須であったが、現代にそうした必要性はなくなっている。森のセンター等での体験はむしろ子から親へと伝播する効果を持っている。生物多様性に向き合うための、そして文化に向き合うための基礎的な修養として体験をどのように次世代に提供していくのか。生物多様性地域戦略等で社会的な取り組み体制の構築をはかるべきだろう。

7 | 終わりに

東日本大震災の後、人が不在となった福島県や宮城県南三陸町等各地でミズアオイなどさまざまな絶滅危惧種が繁茂し始めたという。その地域ではすでに絶滅したと思われていたのだが、震災による攪乱と人間による耕作が行われなくなった後、出現したという（たとえば西澤ら2017）。現地の方々は、「ミズアオイは絶滅したのではなく眠っていたのだ」と言う。

近年私たちは大きな災害を何度も目の当たりにしている。そのたびに「自然とは何なのか」、「人間は自然にとってどのような存在なのか」ということを突きつけられて

いる。そしてそのような災害の後、人々は食べるものも満ち足りないの中で、文化を求め、芸術の大切さを知ったという。東日本大震災の後、東北の各地で見られた現象として瓦礫の中から祭礼の装束を取り出し、祭を行ったという話がある（北村皆雄監督の2017年の映像作品『海の産屋 雄勝法印神楽』 <https://www.uminoubuya.com/> 2018年1月17日確認 等）。また、たとえば福島県二本松市安達原では黒塚という鬼女伝説に心を支えられたと聞く（2017年12月17日トークイベント「地方を内包する文化都市—京都で考える福島・東北・日本」の赤坂憲雄氏の発言より）。大自然の前に人という生物がさらけ出された時、「伝説」という目に見えない文化、つまり私たち人間が生きてきた歴史を確かにしてくれるものを、まさに命綱として、復興に取り組んできたのである。

振り返ってみれば、日常、私たちは伝統文化に接するとき、何か尊いものに接するような気持ちになり、あるいは時に萎縮したりしてしまうこともある。「伝統」といえば、難しい印象を抱かれるが、上記のような人々の試行錯誤による歴史と考えれば、「簡単」であるわけがない。理解をするのに時間がかかるように感じることも、当然のことである。

このようにして、地域の自然は地域の暮らしと景観、文化と結びついて「風土」を形成してきた。生物文化多様性は古くから議論されてきたことだが、危機になって再び脚光が浴びている概念でもある。当たり前につながっていたことが当たり前でなくなった現在、地域にどういった価値があり何が重要なのかを見つめ直す概念整理として、生物文化多様性はひとつの視座を与えてくれるであろう。内向きにながめるだけでなく、地域をブランド化し、売り出していくうえでもまた重要である。ただし、外部に向けた生物文化多様性上の価値を考えると、自分たちの地域だけの伝統と思い込みがちな「セルフオリエンタリズム」の落とし穴（湯本2011）は非常に危険である。日本の伝統文化は、あるいは里山は本当に「自然にやさしかった」のか。自然への配慮は本当に日本独自の

のか。謙虚に世界を知り、冷静に比較して自らを知ることが、息の長いブランディングにつながるだろう。こうした部分には学術研究者の参画が必要だ。

ほかの課題同様、地域と伴走するコーディネーターあるいはプロデューサー役の存在が必要だ。たとえば祇園祭の粽をつくるチマキザサの獣害による減少への対策の努力（阿部ら2011、東口ら2014）は、当事者である鉾町の担い手にも広がっていなかった。こうした生物文化多様性に関する情報や事例を集め、市民とのコミュニケーションをはかる博物館などの拠点づくりは欠かせないだろう。また、体験や交流といった価値はバーチャルな博物館ではなかなか限界があるようだ。教育と資料の蓄積、研究をミッションとする施設への要望は、当日のディスカッションでも、会場外で行ったパネル展示会場でも非常に強かった。市民との対話も担う博物館あるいは生物多様性センターへの期待は京都でも高まっている。自然史系博物館の側でも町家や酒蔵などを利用して、文化的な文脈の中に標本を展示し、見る側の自然への新たな理解を促す試み（<http://www.hitohaku.jp/information/news/legacy-kyoto2016.html> 2018年1月28日確認）をはじめている。博物館による生物文化多様性の発信はハコとしての博物館にとどまらない。今後の展開に期待したい。

謝辞

本稿は筆者らとともに第7回生物多様性協働フォーラムで登壇した佐藤潤氏（鳥獣画家）、吉岡幸雄氏（染司よしおか）、塩澤実氏（茅葺屋代表）、杉本節子（料理研究家）、久山喜久雄（法然院森のセンター）、深町加津枝（京都大学地球環境学学准教授）、湯本貴和（京都大学霊長類研究所教授）らと、西田貴明（三菱UFJリサーチ&コンサルティング）、菊池玲奈（結・社会デザイン事務所）、宮川五十雄、橋本佳延、三橋弘宗ら協働フォーラム事務局のメンバーの議論を基にし、筆者らの見解を加えて執筆した。有益な議論を提供いただいたことに感謝する。

【引用文献】

- ・阿部 佑平・柴田 昌三・奥 敬一・深町 加津枝 (2011) 「京都市におけるササの葉の生産および流通」日本森林学会誌。93(6):270-276
- ・安藤 邦廣・乾 尚彦・山下 浩一 (1995) 「住まいの伝統技術」建築資料研究社
- ・Clayton, S., Myers, G. (2015) Conservation Psychology: Understanding and Promoting Human Care for Nature. John Wiley & Sons Ltd.
- ・奥 敬一・村上 由美子 (2011) 「民家の材料からみた里山利用」(湯本 貴和編『里と林の環境史』) 文一総合出版: 187-208
- ・深町 加津枝 (2014) 「里山の文化多様性を守るために」『エコロジー講座7里山のこれまでとこれから』(日本生態学会 編.) 22-33
- ・深町 加津枝・奥 敬一・横張 真 (1997) 「京都府上世屋・五十河地区を事例とした里山の経年的変容過程の解明」ランドスケープ研究 60(5), 521-526
- ・濱崎 加奈子・勝治 真美 (2015) 「京菓子と琳派：食べるアートの世界」淡交社
- ・Harmon, D. (2002) In light of our differences: how diversity in nature and culture makes us human. Smithsonian Institution Press
- ・東口 涼 (2014) 「祇園祭とチマキザサ-京都産チマキザサの復活を目指して-」竹の教科書2013. 宮津竹の学校実行委員会編. pp.14-15
- ・久山 喜久雄編 (2003) 「大文字山を歩こうー里山で自然観察」ナカニシヤ出版
- ・久山 喜久雄 (2008) 「環境教育の実践から見たソーシャル・イノベーションの視座：市民と寺とが協働する取り組みから」同志社政策科学研究 10(1), 5-14
- ・岩佐 匡展・深町 加津枝・奥 敬一・福井 亘・堀内 美緒・三好 岩生 (2009) 「大都市近郊に位置する京都府木津川市鹿背山地区における1880年代以降の里山景観の変遷」農村計画学会誌 28 Special_Issue :321-326
- ・加藤 美由紀 (2016) 「高等学校生物教科書に見られる生物多様性に関する学習内容の変遷：多様性及び生物多様性の記述内容に着目して」生物教育 56(3), 106-116
- ・石田 悠・釋 知恵子 (2016) 「博物館における学校教育支援のあり方ー大阪市立自然史博物館における教材作成・活用の事例から」日本生態学会誌 66(3) 649-658
- ・内閣府 (2014) 「環境問題に関する世論調査」内閣府大臣官房政府広報室. <http://survey.gov-online.go.jp/h26/h26-kankyou/index.html>
- ・永松 敦 (2017) 「日本人と杜：山の聖地が生み出す生物文化多様性」森林環境2017, 32-43
- ・中村 春作 (1986) 「叢書・日本の思想家26 皆川淇園・大田錦城」明徳出版社
- ・西澤 真樹子・高田 みちよ・渡部 哲也・平田 慎一郎・田中 良尚・松浦 宜弘・佐久間 大輔 (2016) 「2012-2014年に『南三陸勝手に生物相調査隊』により収集された宮城県南三陸町周辺の生物標本目録・観察記録」自然史研究 3(16)、273-292
- ・小川 孔輔 (2008) 「京都ブランドの成り立ちー都市としてのブランド形成の歴史的な変遷と今」イノベーション・マネジメント (5)、1-21
- ・岡本 裕介 (2014) 「里山の後期近代：人々の関係性と文化多様性」人間文化研究：京都学園大学人間文化学会紀要 (33)、97-112, 2014-12
- ・岡野 隆宏・笹淵 紘平 (2017) 「社会経済における生物多様性の主流化に向けた政策の動向」日本生態学会誌67(2) :205-215
- ・大倉 源次郎・生田 ケイ子・濱崎 加奈子・原瑠璃彦 (2017) 「大倉源次郎の能楽談義」淡交社
- ・佐久間 大輔・伊東宏樹 (2011) 「商品経済からみた森林 里山の商品生産と自然」(湯本貴和編『里と林の環境史』) 文一総合出版: 101-128
- ・佐久間 大輔 (2012) 「都市における『食』と生産地の『生物多様性』の2つの課題を結びつける教育実践 研究」月刊生涯学習 5 (7) :10-11
- ・佐久間 大輔・西澤 真樹子 (2012) 「『くつわづる』について」Nature Study 58(2):6-7
- ・佐久間 大輔 (2016) 「絡み合う文化多様性と生物多様性」『営みの基盤ー生態学からの文化的景観再考ー 文化的景観スタディーズ02』奈良文化財研究所: 10-15
- ・Saratsi, E., Bórgi, M., Johann, E., Kirby, K. J., Moreno, D., Watkins, C. 2009 Woodland Cultures in Time and Space - tales from the past, messages for the future. Embryo Publications
- ・敷田 麻実 (2014) 「自然共生社会の実現に向けた生物文化多様性の議論」環境経済・政策研究 7(1), 73-76
- ・敷田 麻実 (2015) 「『生物文化多様性』：生物と文化の多様性：考えるバイラテラルアプローチ」ワイルドライフ・フォーラム 20(1), 23-25
- ・杉本 節子 (2008) 「京町家・杉本家の献立帖ー旨いおかずの暦」小学館
- ・須賀 丈 (2013) 「地域の生物文化多様性とグローバリゼーションへの歴史的視座」長野県環境保全研究所研究報告 (9), 1-16
- ・Patrick, P., Matthews, C., Ayers, D. & Tunnicliffe, S. (2007). Conservation and education: prominent themes in zoo mission statements. The Journal of Environmental Education 38(3), 53-60
- ・UNESCO (2007) <http://unesdoc.unesco.org/images/0015/001592/159255E.pdf>
- ・ジャック ウェストビー (著)、熊崎 実 (訳) (1990) 「森と人間の歴史」築地書館
- ・湯本 貴和編 (2011) 「環境史とは何か」(シリーズ日本列島の三万五千年：人と自然の環境史) 文一総合出版 ※このシリーズは全6巻で構成されるが生物文化多様性に関する記述が多い。
- ・湯本 貴和 (2017) 「照葉樹林の生物文化多様性とその活用」森林環境 (2017)、124-133 ※同号には「特集 森のめぐみと生物文化多様性ー未来の人と森の関係：生物文化多様性はどう変化するのか?」が掲載されており、参考になる論文が多い
- ・吉岡 幸雄 (2010) 「千年の色ー古き日本の美しさ」PHP研究所
- ・吉野 滋治 (2005) 「京の伝統野菜 (第23回) 茎大根と桃山大根ーたくあんを担って」農耕と園芸 60(11), 132-134